

災害に備える

我が家の長女は、二〇一一年四月に福島で誕生しました。東日本大震災が発生したとき、妻は既に福島の実家に帰省していて、出産まであと一カ月ぐらいという状態でした。そんな中、三月十一日に大きな地震が襲い、その後は余震の恐怖の中、放射能汚染が問題になる地域だったので、当然外出どころか窓を開けることもできない(当時エアコンを使うと放射能が室内に入ってくるという噂が町中に広まっていたそうです)状態でした。また、水、ガス、電気といったライフラインは全て止まり、水やガスを使う風呂には一週間以上入れず、トイレの水は両親が近くの川に汲みにいって流していたそうです。身近な人がそういった辛い経験をしたため、私自身周りの人より災害に対する意識は強くなったと思います。ですから、定期的に避難用バッグなどをチェックするようにになりました。



首都圏でも最近比較的大きな地震が何度も起き、改めて地震への備えは必要だなあ、と感じていましたが、そんなときに、また別の災害がおきました。それは御嶽山の噴火です。地球は四十六億年前に誕生し、長い年月をかけて様々な変化をしてきました。地球の表面には何枚もの岩でできたプレート(地球を卵でイメージすると殻みたいなもの)が地球の中にあるマンツルの対流によって移動し、プレート同士がぶつかる境目で地震が発生したり、火山の活動が起きたりします。そんな

ことは、中学校で習うことなので、当然自分が住んでいる日本では火山が噴火しても何もおかしなことではないのですが、三年前に起きた地震と比べると、火山の噴火に対する準備が十分ではなかったと思います。

我々が住んでいる場所は、活火山である富士山(昔は休火山に分類されていました)が噴火した場合、火山灰が偏西風に流されて降灰する地域です。もし火山灰が降ってきたら……。火山灰は爆発の際にマグマが冷えながら細かく引きちぎれる関係で、二mm以下ととても小さいながらも、降灰するときはとても鋭利な形をしています。したがって、コンタクトをしている人の目の中に入ると角膜を傷つけることがあるそうです。また、火山灰に付着している火山ガス成分は少量の水につくと酸性の性質を持つため、皮膚が炎症しないように極力肌を露出しない方が良いでしょう。非常に細かい火山灰は精密機械(パソコンやスマホなど)の中に入って静電気によって内部に付着してしまうことで故障しやすくなるそうです。このようなことを調べて学んでいくと、地震災害用の我が家の避難用バッグではまったく十分ではないことが分かります。新たに防塵マスクやゴーグル、長袖の衣類や精密機械を覆うためにサララップの常備もしておかなければならないことになりました。



こういつた非常に備えて、どこまで準備するか、という点でキリがないのも確かですが、いつか起きるかもしれない災害を意識することはとても大事だと思います。自分で調べて学び、どこまで備えておくかを考える。いざ災害が起きた時に困らないように。

(長坂)

「黒」の反動

第二次世界大戦後に日本人によって考案され、今ではボードゲームの世界的定番となったオセロ。高校受験を控えた中学三年生のとき、私は親友のAくんとオセロの世界にどっぷりとはまっていくなことになる。

朝も七時には登校しオセロを開始、放課後も夜遅くまで対局し続けた。おそらく中学卒業までに何千局と対戦したと思う。おかげでオセロの実力はついたが、それは反比例して模試の成績は下がっていった。(勉強していないので当然だが……)



勉強しなければいけないと分かっていたが、塾にも通っていない私は何をどう勉強してよいのかが分からずに、オセロに没頭することで現実逃避していた。本当は誰かに救いの手を差し伸べてほしかったのだが……。

一方で勉強しない私にイライラする母。高校の進路を決める三者面談を目前にしたある日、私は母と大喧嘩をした。そこから中学卒業まで母とは一切口をきかなくなった。母が作る食事も全く食べなくなった。エスカレートして暴言を吐き、ときには唾を吐くことさえあった。そんな私を力でねじ伏せようとした父とは何度も殴り合い、私は全力で父を倒そうとした。私の暴拳を止めようと大学受験を控えた兄とも血染めになりながら殴り合った。家庭崩壊寸前。そんな中、私の心の中にあつたもの。それは「家族なのに誰も助けてくれない。」という孤独感だけだった。(唯一母方の祖母だけが心の拠り所になってくれた。)

それから家族に対する感謝の気持ちなんてなかったのだが、大学生のとき母から送られてきた一通の手紙で価値観が一八〇度変わることになる。手紙にはこんなことが書かれていた―「お母さんが生まれてこられたことにも感謝。あなたが生まれてきてくれたことにも感謝。」読んだ瞬間、まるでオセロの黒の列が音を立てて全部白にひっくりかえるようだった。その場で泣き崩れたことを今でも覚えている。

非情な振る舞いをしてきた私に「生まれてくれてありがとう」と言ってくれた母。食べないとわかっていても毎日欠かさず食事を作り続けてくれた母。学費を捻出するためにおしゃれもできなかった母。塾講師に就職が決まったとき、私は複雑な気持ちだった。裕福ではないながらも、膨大な学費をかけてもらいながら、大学で専攻した建築の道へ進まなかったことに後ろめたさを感じていたからだ。それでも、「自分のやりたいことが見つかったのならよかったじゃない。」と喜んでくれた母。

その後、今から二年前に母方の祖母が亡くなった。祖母の遺体の傍らに座っていると、涙をこらえきれなくなった。家族の中で居場所を失っていたあのとき、心の拠り所になってくれた祖母。家ではご飯を食べない私に、何も語らずに温かいご飯を作ってくれた祖母。祖母には三人の娘と一人の息子がいるが、次女の母にのみ介護を託していた。母は母だけではない。祖母にとっては大切な娘でもあったのだ。祖母は娘にどんな夢を抱いたのだろうか。よもや自分の可愛い娘が、睡眠薬を飲まないで眠れないくらい辛い日々を送ることになるなんて、夢にも思っていないかったらう。娘を苦しめている諸悪の根源で



ある孫のために、祖母はどんな想いでご飯を作ってくれていたのだろうか。「ばあちゃん本当にごめん……。」また母を苦しめていたことを改めて知り、「お母さんが生まれてこられたことにも感謝」という母の手紙の言葉も思い出されて、よけいに涙が止まらなくなった。

今までずっと愛情を注いでくれていた母に対して自分がしてきたことを思うと空ろろしくなる。親たることに文字通り、命懸けで私と向き合ってくれた父と母を私は無条件で尊敬する。そのために私は家族からどれだけ多くのものを奪ってしまったのだろうか。そう思うと申し訳ない気持ちでいっぱいになる。同時に、不満や悩みが大きかった分、今では感謝の気持ちも大きい。もしも中学時代の「黒い過去」がなかったとしたら、この計り知れない感謝の気持ちは生まれてこなかったかもしれない。

過去の事実は変えられないが、意味づけは変えられる。人生はオセロに似ているように思う。人は生まれたとき、誰もが祝福の「白」を渡される。多くの人の人生は「白」の駒から始まる。しかし、そのあと、自分が恵まれていないことを知ったり、嫌なことを経験したりすると、黒い駒がどんどん置かれていく。

でも、人生のどこかで白を置くことができれば、黒は全部白に変わる。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

白を置くのは最後の最後まで良い。なぜならその白は、苦しみや悩みがあったからこそ置くことのできた、すべての黒に支えられた白なのだから。

母があと三〇年生きられるとしても、離れて暮らしている母と会える時間はどれくらいあるのだろうか。

うか。その限られた時間の中で、親孝行して最後の白い駒を置ける日は果たして来るのだろうか。今度実家に帰ったとき、肩でも揉みながら、母の青春時代のことや夢など聞いてみたいと思う。(櫻村)

チキンハートの愛しき生徒達

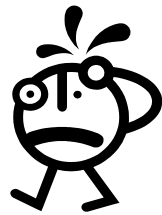
●テストのときに緊張してしまう生徒が多い。年々増えているような気がする。本当にかわいそうだし、残念なことだ。

●過度に緊張し、力を出せない人々をチキンハートの持ち主という。教師も友人も大人も、そういう持ち主に、無責任なアドバイスをする。「もっと落ち着いて」「プラス思考で」「もっと前向きに」「気楽にやればいいんだよ」。当事者から見れば、うんざりだ。ヘドが出そうになる。「うつ病」の人に「頑張つて」は禁句だが、それを知らずに励まし続けて結果的に追い込んでしまうのと同様に、周囲の無責任なアドバイスがチキンハートの持ち主を追いつめていくこともありうる。

●さて、チキンハートの持ち主は、きっとこれからも何回か失敗を繰り返していくだろう。それは仕方のないことだ。では、きみ達の人生は、もう終わっているのかというと、そうではない。人間の特性は、動物的本能を超えて、「学習」出来ることにある。知性を駆使し、分析し、理屈を組み立てて、実践し、修正できるのだ。だから、諦めてはいけない。きつと、きみは前に進める。きつと、きみは成長した自分に会える。では、どうすればいいの。

●まず、きみの長所の確認から。チキンハートの人は、共通に次のような長所を持っている。①向上心が強い ②理想が高い ③敏感である。こうした長所は、うまく作用すれば、大きな力を発揮する。自分のやりたいことを見つけ、周囲の人の役に立てることが可能となる。

●一方、これがマイナスに働くと、きみを苦しめることも多い。努力できない自分、成績が伸びない自分、勉強が続かない自分を、常に責める。勉強しているときも、その行為は無意識のうちに続けている。結果、時間の割に勉強は進まない。そして、また自分を責める。テストになると、その反動がでたりして、高得点を目指す。途中で、解けない問題があると、落ち着きをなくし、パニックになる。結果、理想の高い自分には許すことのできない低い得点。こんなことをくり返す。



●分かるかい。きみの長所が、そのままきみの弱点にもなっているのだ。まず、このことを確認しよう。これが成長への第一歩。

- 次に、事実の確認である。
- ①学力は一步一步進むことで身につく。地道な努力こそが重要なのに、きみはそれを忘れて、一発で決めようとしている。
- ②得点は後からついてくる。まず、勉強をして、知識を身につけ、その使い方を身につける。この蓄積を学力とよぶが、学力がある程度たまるまで、得点は伸びない。たとえば、単語を百個覚えても、模試の得点はほとんど伸びないことを考えれば、了解できるはず。
- ③不安は高い目標の裏返し。志望校のレベルを、

うんと下げれば、必ず合格するのに、それはできない。あなたの向上心が許さない。現実と目標のギャップが大きければ大きいほど不安は大きくなる。そしてそれは消えることはない。永久に。そのことを認めて、不安をかかえたまま生きるしかないのだ。

④続けることをやめてはいけない。続けていれば、少なくとも維持はできる。しかし、続けるのをやめた時から、学力の低下が始まる。実は自分でも、それは分かっているはず。

⑤伸びは続けていった結果としてしか得られない。続けられれば、少なくとも維持はできると書いたが、当然維持だけでは伸びも合格もおぼつかない。そこで、続けることへの疑問、使っている教材への疑いが発生する。しかし、やめたらダメ。続けていく中で、自分のやり方の欠点に気付く、それを修正し続けるうえでのコツをつかんでいくしかないのだ。



⑥人の能力はかなりある。とはいっても、自分の能力のなさに絶望的になっている受験生も多し。気持はよく分る。私もそういうことをくり返してきた人間だから。しかし、それは間違っているのだ。それを使い切っていないだけ。それを十分に使うにはどうするか。今こうして、きみ達に問いかけてるように、分析と確認と修正を怠らず、やるべき作業を続け、やり方を修正していくしかないのだ。(以下次号) (小林)

▼▲継続希望の方へ▲▼
 ▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
 ▶在籍していた教室までご連絡ください。